見通しの悪い交差点・事故の心理学（2）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 吉田, 信彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/534

事故の心理学〈2〉

吉田信彌

見通しの悪い交差点

"見せるため"の一時停止

歩道を通行するのは歩行者ではなく疾走する自転車である、と頭を切りかえてください。それが前回のお願いでした。

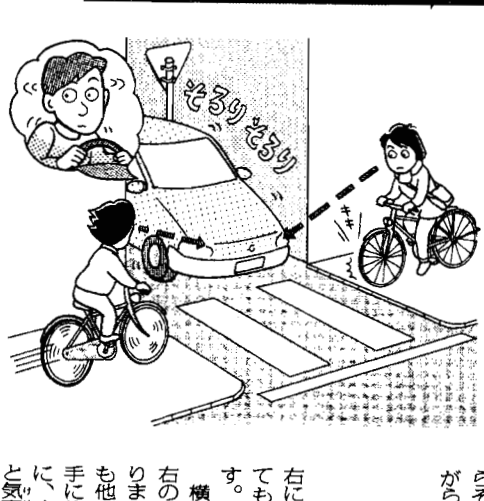
自動車が左折および右折して横断歩道にかかるときには、首を左右に振る角度を、今以上に大きくして、遠くから自転車が駆け込んでこないかの安全確認をしましょう。

もし、歩道から横断歩道へと自転車が駆け込んでくると想定すれば、図のような、見通しの利かない路地から歩道のある広い道路に出るとき、乗用車はどうすべきでしょうか。

左右の見通しの利く地点である横断歩道へと、一気に進むとします。その時、自転車が歩道から横断歩道へと進んできたら、衝突は免れません。

衝突を避けるには、横断歩道の前で、一旦、停止しなければなりません。もちろん、その地点から、左右の見通しは利かないでしょう。そのため、「見えないところで止まってどうする」と怒るドライバーもいます。

通常、このような交差点には「一時停止」の標識と「停止線」が設けられています。停止線の手前で止まっても、左右に見通しが利かず、まして遠くにいる自転車など見えるはずがない、というのが運転者の言い分です。しかし、止まらなければ衝突してしまいます。



運転者は、左右の見通しが利くところで停止するのではなく、停止線のところで停止し、そこからそろりそろり前に出ながら、自車の鼻先を、左右に通行する自転車に見てもらうしかないのです。

横断歩道の手前でも左右の見通しは十分ではありません。自ら見るよりも他者に見てもらい、相手に徐行してもらうように、ゆっくりと左右の音と気配を探りながら慎重に横断歩道の中へと進むのが、このような場所の正しい通行法と言えるでしょう。

ベテランほど自分で確認しないと気がすまず、自分で見ようと思って前に出ます。歩行者は自動車の気配を感じ、すぐ止まる、あるいは逃げてくれます。しかし、速度のついた自転車は止まれません。今まで停止線で止まらなくとも事故に遭わなかったという人は、運がよかっただけのことなのです。

自転車の側にも注意が必要なことは言うまでもありません。歩道から横断歩道へと移るときが問題です。切れ目には段差があり、自転車の座席に響くほどです。それで自転車は目を段差に向けてしまい、迫ってくる自動車に気づくのが遅れます。

だから、歩道から横断歩道へと切りかわる場所では、段差と進入する自動車との両方を同時に注意しながら通過しなければなりません。技術がいるのです。

段差を「えい」とお尻を上げて、勢いで通過するのは、賢明な方法でないことは明らかですが、子供や若い人の自転車はそうなりがちです。「段差のところでブレーキをかける」、かつ「ブレーキしながら周囲を見る」ことの必要性を認識すべきです。

自転車の乗り方で難しいのは、このブレーキ操作です。もっと言えば「止まるという心構え」です。

それは子供に自転車の乗り方を教えるときに教えるべきことですが、つい、大人は転ぶことなく自転車をこげればよし、と思いがちです。子供には、自転車は乗るよりも止まる操作が難しいことを教えるべきです。もちろんマナーとともにですが……。

止める難しさが自転車にも自動車にも共通にあります。横断歩道の前で止まることの大切さは今回の連載で分かっていただけたことでしょう。

しかし、このような知識があっても、止まれるとは限らないのが人間です。分かっていても、それが実行できないエラーがあります。知識と実行の間のできるすき間を埋めるように、自らを修練する必要があるのです。だから止まるのは案外難しいことなのです。

（東北学院大学教授）

聖教新聞